

問題訂正

国語

訂正箇所	国語問題冊子 10 ページ 第三問 問題文 6 行目
誤	正
四国「 <small>ニ</small> 非 <small>ズンバ</small> 文王、 <small>ニ</small> 其誰能為 <small>レ</small> 此也。 <small>(A)</small>	四国「 <small>ニ</small> 非 <small>ズンバ</small> 文王、 <small>ニ</small> 其誰能為 <small>レ</small> 此也。 <small>(A)</small>

訂正箇所	国語問題冊子 7 ページ 第二問 問題文 1 6 行目
誤	正
さにぞ	さこそ

— 次の文章を読んで、問一〜五に答えなさい。(配点八〇点)

こういう問いから、始めてみよう。「暴力のない世界」などというものはありうるのだろうか？ もちろん、ある。ごくふつうに考えて、人間が登場する前の地球上には暴力などというものはなかったのだし、ましてや知的生命体が不在の惑星や星系にも、暴力は存在しない。どんなに暴虐な自然力が荒れ狂っていても、それは暴力ではない。もちろん私たちはしばしば、動物たちのあいだの命のやりとりにも暴力的なものを感じたりもするわけだが、それはあくまで「人間の目からすれば」という見立てのうえのことである。さらにいえば、人間のいとなみを事実としてまったくそのままにしつつ、暴力を消し去ることすらできる。すべてをたんなる自然現象として眺めやるまなざしに切り替えればよいのである。より具体的には神とか、はるかに高度な知的存在の視点に想像上立って、人間のいとなみを眺めてみるのである。個別の行為にしる戦争などの集団的なものにして、すべては自然の力のうねりとして、「ただそうなるだけ」の世界に見えてくるのではないだろうか。そこには善いも悪いもなく、暴力も何もない。あるいは、あえて暴力と名指すにしても、「ただ、ある」だけの原初的な暴力というべきか。ともあれそこでの眺めは、あたかも巨大な蟻塚ありづかに住まう無数のアリたちのいとなみのように映ることだろう。

もちろん私たちも、他の種とまったく同列の動物からだんだんと人間になってきたのだから、もともとは「ただそうなるだけ」の世界に暮らしていたのである。ということは、そこからの過程のどこかで「ただそうなるだけ」のフラットな世界に亀裂が入り、世界がセイジャ(a)や美醜みしうに満ちるようになり、暴力が暴力としての相貌で立ちあがってくる段階があつたのだ。その具体的なプロセスはおそらく、「心の理論」の発達への脳科学的アプローチとか、倫理の進化論的探究といった、あれこれの実証的研究の俎上そじょうに上がっているだろう。また、「内面の誕生」などを探究する思想史的研究の一部が示すように、この亀裂は意外と目新しいものかもしれない(枢軸時代以降？ キリスト教以降？)、あるいは「心の内」や「意図」なる概念はやがて消え去るものと展望する一部の「心の哲学」に理があるとするなら、私たちはいずれ「ただそうなるだけ」の世界にカイキ(b)していくのかもしれない(もちろん前段落で示したような自然現象化、ひいてはすべての自然科学化というヴァージョンアップを伴いつ

つ)。ただしここでは、具体的なタイムラインや今後の帰趨きすうはそれほど重要ではない。重要なのは、そうした亀裂と暴力の関係性である。

いまトウトツに「心の理論」や「内面の誕生」といった話を出したが、それはもちろん、そうしたことが暴力の成立に深くかかわっていると考えるからである。他人から攻撃を受けたり、身体的に傷つけられたりしても、その他人に心や意図を認めないなら、それは暴力にはならない。動物に噛かまれたり、機械に手をはさまれたりするのは大差ない出来事である。他人に心や内面、意図などを認め、おそらくそれと並行的に、あるいは合わせ鏡のようにして、自己の内面にも心を定位させる「心の理論」が成り立つてこそ、暴力は暴力として立ち現われる。なんといっても、悪意、敵意、危害への意図、怒りや恨みといったネガティブな情動、そういったものを他者に帰属させることこそが、暴力概念には中心的な成分として含まれているはずだから。しかしでは、とここで自問したい。まず心や内面、そしてそれらをそなえる他者や自己というものが成り立つて、それからおもむろに暴力が現象するようになったのか？ むしろ害を被るといふ原初的な暴力の経験——「ただ、ある」だけの暴力——こそが、他者や自己の成立をうながしたり、あるいは同時生成的だったりすることも、考えられるのではないか？

もちろんこれは実証も何もない哲学的仮説、というより哲学的想像の話である。しかし、もってもらいたい想像として描き出せないわけでもない。たとえばもし、食糧にしる生殖面にしる気候にしる、何もかも満ち足りて何の苦労もなく生きていける環境だったら、人間ははたしてものを考えるようになったらどうか。おそらく、そうではない。世界がそんな楽園ではなかったからこそ、人はものを考え、工夫をこらし、技術や科学を編み出してきたのである。同じように、あらゆる人びとが穏やかで友好的で、なめらかな秩序のもとに共生していたとしたら、他人の心の内を深く考えることがあるだろうか。人はふつう、他人によくしてもらったとき、「この人はどうしてこんなことをするんだらう」と問うたりはしない。意外な好意などの場合はもちろんありうるが、深く真剣に考えつくすようなことはまずない。しかし逆に他人から害を被ったとなると、段違いの真剣さで思考が発動される。この人はどうしてこんなことをするのか、なぜ自分はこんな目に遭わなければならないのか……。こう考えると、人びとの共生なるものが楽園的なものではまったくないからこそ、独自の、そしてときにはかり知れない内面をもつ他者というもの

が、まさに他者として立ち現われる次第になったのではないかとも思えてくる。

他者がいるから暴力があるというだけでなく、暴力があるからこそ他者がいる。他者とはその起源上、暴力をふるうもの、ふるいうるものである。もちろんこれは、あまりにネガティブな極論かもしれない。しかしすくなくとも、原初的な暴力が、心や内面、他者といったものがこの世界に出現する契機の一部になった可能性なら、考えうるのではないか。他者の絶対性、過酷さ、はかり知れなさ、自己との根源的隔たり等を強調する哲学思想はさまざまにあるが、それらの底にも、似たような直観があるのではないか。「ただそうなっているだけ」の世界から、人間的な「この世界」が立ち上がる一契機としての暴力。暴力はまず、このような哲学的問題の相貌をもつように思われる。

もう一点、一般的な「力(force)」の観点から、暴力(violence)について考えてみる。

前節で、「世界が樂園でないからこそ……」というモチーフを提示した。そして、だからこそ「ただそうなっているだけ」の世界から、この世界が立ち上がったのでは、と。では私たちが暮らすのは、自然面にしろ社会面にしろ、暴虐な力が荒れ狂っているような世界なのだろうか。もちろん、そんなことはない。むしろさまざま「力」がバランスを保って、まずはほどよく安定している場所、それが私たちの世界である。かけねなしの樂園にはほど遠くても、「半樂園」くらいには言ってもよいのではないか。

たとえば、惑星としての地球のありようを考えてみれば、このことに深く感じ入らざるをえない。太陽とのほどよい距離、ほどよい自転・公転周期、有害な宇宙線をさえぎる地磁気や大気、気候の安定とほどよい循環を生み出す大陸や海洋、そして月、危険な小天体を引きつけて地球を「保護」してくれる木星の存在……。無数の力がせめぎあいつつ、僥倖さようちゆうのようなバランスがなぜかちょうどよくとられ、私たち生き物が生息できる地球環境が実現されている。どれかひとつがちよつとずれただけで——宇宙的な時間スケールでみるなら、いずれそうなるのだろうか——数々の「ほどよさ」が崩壊し、生命が死滅しかねないような精妙さである。

似たようなことは、歴史的・地理的条件つきにはなるにせよ、私たちの社会にもおおむね共通するだろう。外出するたびごと

にのべつ命の危険を感じないで済むのは、屋外に出ることに太陽光に焼き尽くされる心配をしないで済むのと似ている。私たちの社会は長年の積み重ねを経て、物理的な腕力や武力にしろ、心理的・言語的な力にしろ、まずはそれほどの憂いなく暮らしている。バランスのもとに収めることに、大筋のところ成功している。もちろん過去をさかのぼれば、あるいは現在でも地域によつては、こうしたバランスが根本から破壊されることもしばしばだが……。

以上の簡単な観察から、二つのことが言えるように思われる。まず第一に、暴力が暴力として際立ついわば背景的な条件として、あるいは「囟」にたいする「地」として、「大筋のところの安定」が必要なのではないか、ということだ。ごく一般的に言つて、不安定は安定を、無秩序は秩序を背景にして成り立つ。すべてが不安定や無秩序の混沌こんどんに陥つたなら、それはその世界のキチョウ(d)としてノーマルなものになってしまうか、あるいはその世界そのものがもたなくなり、不安定も何もなくなってしまふかのどちらかだろう。どんなに暴力に満ちた社会であろうと、暴力が暴力として際立つかぎり、秩序や平穩といったものがその背景として、あるいはすくなくとも隣接する比較対象として、存在するのである。

そして第二に、これはより重要と思えることだが、特異点(7)としての暴力は、その背景であるノーマルな秩序に対立するものというより、むしろそれとの連続性にあるということだ。物理的にも社会的にも、この世界はさまざまな力に満ちている。たとえば、建物を考えてみよう。一見ゆるぎなく、静かに佇たぐんで見える建物でも、そこには絶え間なく強大な力がみなぎり、働いている。ただ通常、それらは精密な構造計算や建築技術のもと、秩序立ったバランスを保っているだけである。屋根や上層階が四六時中柱に荷重をかけつづける一方で、柱はそれを受けとめ、逆方向の力を拮抗きつこうさせている。そうした見えざる潜在的な力は、たとえば大地震でバランスを揺るがされることによつて顕在化し、建物を損傷や倒壊へ導く。損傷や倒壊はもちろんイレギュラーな事態には違いないが、しかしそれをもたらす「力」の観点からいえば、通常の状態とひとつながりなのである。

このような事情は、人間のあいだの身体的、社会的、制度的、言語的等々の力のありようにも、類比的に拡張できるだろう。身体的な接触と距離をめぐる力学、社会的・制度的な力関係のネットワーク、言葉を介して行きかうコミュニケーションの力のやりとり。これらは通常、ほどよいバランスのもと、穏やかで安定した状態にある。しかし建物と同様、そこにはたえず無数の

力がみなぎっているものであり、あれこれのきつかけで、その潜在的な力は顕在的なものとして発現する。そのきつかけはさまざま、ちよつとした行き違いや無配慮であったり(たとえば「心ない言葉」)、一方的な思い込みによるものだったり(たとえば非意図的なハラスメント)、あからさまな悪意や敵意によるものだったりする(殴る蹴る、^(e)ブジョクや罵倒など)。前の例から後のほうの例へと移行するにつれ、力の発現はあからさまな暴力になっていくが、しかし行き違いや無配慮によるものであっても、しばしばそこには暴力性が感受される。そしてこのような度合いをもった連続性は、顕在的な力の暴力としての発現が、通常の秩序を構成している潜在的な力のネットワークとひとながりであることを示唆する。暴力はこの面でも、この世界のありようそのものに深くつながれているのである。

以上二点の「哲学的問題」としての暴力のありようをまとめれば、要は暴力は私たちの世界に深く食い込み、つながれているというヴィジョンである。この世界の可能性の一部は、そのまま暴力の可能性そのものでもある、という認識である。これはひどくネガテイヴな、救いようのない考えに見えるかもしれない。しかし私たちは、こういう地点から始めることこそが、リアリティのある姿勢だと考える。すくなくとも、暴力を文字通り特異な特異点として例外視し、その克服や撲滅を制度的、技術的、操作主義的な視点で語るようなスタンスに比べれば、余程そうである。だから私たちは、もちろんときに暴力へどう対処すべきかを語ることはあるにせよ、それは撲滅などといった歯切れのよい言葉ではなく、回避や対応といった語彙を軸にしたものになるだろう。「折り合いをつける」と言ってしまうばあまりに弱腰に聞こえるかもしれないが、しかし技術的な対処などそうやすやすとはできまいという立ち位置は、暴力の根深さ、その現れの多様性、その概念的多層性などをリアルに見すえていく拠点になるはずである。

(飯野勝己「暴力はいかにして哲学の問題になるのか」より)

〔注〕 ○枢軸時代——後世のさまざまな宗教や哲学の源流となる考えが世界各地で同時並行的に登場したとされる、紀元前五〇〇年前後の時代。

問一 傍線部(ア)「そうしたことが暴力の成立に深くかかわっている」とあるが、どういふことか。八〇字以内で説明しなさい。

問二 傍線部(イ)「暴力があるからこそ他者がいる」とあるが、どういふことか。八〇字以内で説明しなさい。

問三 傍線部(ウ)「特異点としての暴力は、その背景であるノーマルな秩序に対立するものというより、むしろそれとの連続性にある」とあるが、どういふことか。八〇字以内で説明しなさい。

問四 傍線部(エ)「暴力は私たちの世界に深く食い込み、つながれている」とあるが、どういふことか。本文全体の論旨をふまえたうえで、一六〇字以内で説明しなさい。

問五 傍線部(a)～(e)を漢字に改めなさい。はつきりと、くずさないで書くこと。

二 次の記事は、織姫と彦星が七夕に逢うという伝説を題材として詠まれた和歌についての評論である。これを読んで、問一〜六に答えなさい。(配点四〇点)

あまの河あさせしら波たどりつつわたりはてねばあけぞしにける

この歌の心は、あまの河の深さに、あさせ白波たどりて、河の岸に立てるほどに、明けぬれば、「今はいかがはせむ」と、逢はでかへりぬるなり。さることやはあるべき。ただの人すら、ひととせを、夜昼恋ひくらして、たまたま、女逢ふべき夜なれば、いかにしても、かまへて渡るらむものを。まして、たなばたと申す星宿には、おはせずや。あまの河、深しとて、かへり給ふべきにあらず。いかにいはむや。その河には、かささぎありて、「紅葉をはしに渡し」ともいひ、「わたしもりふねはや渡せ」ともいひ、「君渡りなば楫かくしてよ」とも詠めり。かたがたに、渡らむことは、さまたげあらじ。わたしもりの、人を渡すは、知る知らぬはあるべき。七夕の、心ざしありて、渡らむとあらむに、わたしもり、などてかいなび申さむ。また、河も、さまでやは深からむ。かたがたに、心得られぬことなり。また、ひがごとを詠みたらむ歌を、古今に、躬恒・貫之、まさに入れむやは。たとひ、かの人々こそ、あやまちて入れめ、延喜の聖主、のぞかせ給はざらむやは。もし、古今の書きあやまりかと思ひて、あまたの本をみれば、みな、「わたりはてねば」とあり。おろさかしき人の、書きたる本にやあらむ、「わたりはつれば」と書ける本もあり。おぼつかなきに、人に、尋ね申ししは、なほ、「わたりはてねば」とあるべきなめり。「わたりはつれば」とあるは、あしきなめり。かやうのことは、古き歌の、ひとつの姿なり。恋ひかなしみて、立ちぬ待ちつることは、ひととせなり。たまたま、待ちつけて、逢へることは、ただ、ひと夜なり。その程の、まことにすくなければ、まことには、逢ひたれど、中々にて、逢はぬかのやうにおぼゆるなり。されば、程のすくなきに、「逢はぬ心ちこそすれ」と詠むべけれど、歌のならひにて、さもよみ、また、逢ひたれど、ひとへに、まだ逢はぬさまに詠めるなり。たとへば、月の、山のはに出でて、山のはに入る、と詠むがごとし。いつかは、月、山より出でて、山には入る。されども、うち見るが、さ見ゆるを、「さにぞおぼゆれ」とはいはで、ひとへに、山より出づるやうに詠むなり。これのみかは。花を、しら雲に似せ、紅葉を、錦に似せなどするも、ひとへに、それにこそはなすめ

れ。ことたがふもの、人の物いふは、似たる物をも、ひとへになし、聞かぬ事をも、聞きたるやうにこそはいふめれ。それがやうに、歌も、逢ひながら、逢はずとはいふなり、とこそ承はりしか。⁽³⁾

〔俊頼髓脳〕より

〔注〕 ○星宿——星座のこと。

○わたしもり——渡し舟の船頭。

○楫——舟をこぐのに用いる道具。

○古今——『古今和歌集』。日本初の勅撰和歌集。

○躬恒——わおしこうちのみつね凡河内躬恒。生没年未詳。平安前期の歌人。

○延喜の聖主——醍醐天皇（八八五〜九三〇）。

○ことたがふもの——人以外の生物。

問一 傍線部(a)と(c)の「ぬ」の文法的な説明として正しいものを次の中から選び、記号で答えなさい。同じものを二回以上選んでもよい。

イ 完了の助動詞「ぬ」の連体形の一部

ロ 動詞の活用語尾

ハ 打消の助動詞「ず」の連体形

ニ 完了の助動詞「ぬ」の終止形

ホ 完了の助動詞「ぬ」の已然形の一部

問二 傍線部(ア)～(エ)を現代語訳しなさい。

問三 傍線部(1)について、「さること」の内容を明らかにしながら現代語訳しなさい。

問四 筆者が、「あまの河」の和歌を傍線部(2)のように捉えた理由を、五〇字以内で説明しなさい。

問五 傍線部(3)はどのようなことを述べているのか。「歌」についての筆者の解釈を補いながら、八〇字以内で説明しなさい。

問六 傍線部(A)の人物の作品として正しいものを一つ選び、記号で答えなさい。

- イ 『讃岐典侍日記』 ロ 『土佐日記』 ハ 『更級日記』 ニ 『十六夜日記』
ホ 『蜻蛉日記』

三 次の文章は、思想家の孔子が、音楽家の師襄子から琴を学んだときのエピソードを記したものである。これを読んで、問一〜四に答えなさい（設問の都合で返り点や送り仮名、振り仮名を省略した部分がある）。（配点三〇点）

孔子学^ビ鼓^{スルヲ}琴^{ギンヲ}師襄子^{シヤウシニ}十日不^レ進^マ。師襄子曰^ク「可以益^{マス}矣。」孔子曰^ク「丘已習^ニ其曲^ヲ矣、未得其数也。」有^レ問曰^ク「已習^ニ其曲^ヲ、可以益矣。」孔子曰^ク「丘未得其志也。」有^レ問曰^ク「已習^ニ其志^ヲ、可以益矣。」孔子曰^ク「丘未得其为人也。」有^レ問曰^ク「有^レ所^ニ穆^{ボク}然^{ゼントシテ}、深思^{スル}焉。有^レ所^ニ怡^イ然^{ゼントシテ}、高望^ク而遠志^{クス}焉。」曰^ク「丘得^ニ其^ノ為^レ人^ト。黯^{あん}然^{ゼントシテ}而黒^ク、幾^き然^{ゼントシテ}而長^{たけたかク}、眼^ハ如^ク望^ク羊^{ヤウノ}、如^ク王^{タルガ}三^ニ四^ニ国^ニ。」非^{ズンバ}文王^ニ其誰能^{カク}為^レ此^也。師襄子辟^{サケテ}席^ヲ再^{シテ}拜^{シテ}曰^ク「師^ハ蓋^シ云^フ文王^ノ操^ト也。」

（司馬遷『史記』より）

〔注〕 ○鼓 ——（楽器を）弾くという動詞。

○琴 —— 七弦琴。聖人の伏羲氏^{フクギシ}あるいは神農氏^{シンのうし}が造った楽器とされ、君子の学ぶべき教養として儒家で重んぜられた。

○師襄子 —— 魯国あるいは衛国の音楽家であり、琴や磬^{けい}（石製の体鳴楽器）の名手であったとされる。

○益——増やす。この場合は、次の曲に進むの意味。

○丘——孔子の名。ここでは一人称。

○数——拍節・テンポ。

○穆然——落ちついたさま。

○怡然——楽しみ喜ぶさま。

○黯然——色黒いさま。

○幾然——背の高いさま。

○望羊——遠くを望み見るさま。遠い目つき。

○文王——周の文王。暴君である殷の紂王ちゆうわうに対抗し、新たな王朝「周」の基礎を築いた。儒家における理想的人物の一人。

○辟席——座布団のような敷物からおりる。謙遜をあらわす動作。

○操——琴の楽曲を意味する。

問一 傍線部①「己ニ」、②「為リ人ト」、③「蓋シ」の読み方をすべて平仮名で書きなさい。

問二 傍線部(A)、(イ)をすべて平仮名で書き下しなさい(現代仮名遣いでよい)。

問三 傍線部(A)を、平易な現代語に訳しなさい。

問四 師襄子が、傍線部(B)に書かれたように敬意をあらわした理由を、本文に即して五〇字以内で説明しなさい。